
編集後記

「日本の優れたモノづくりはどうなっているのか」が、小川絏一東京大学教授作成の「日本企業のシェア推移図」に端的に表されています。DRAMという計算機で使われる記憶素子、テレビやパソコンに使われる液晶パネル、DVDプレーヤ、カーナビゲーション、最近話題になっている太陽電池パネルはいずれも、開発初期には、日本の優れた研究開発によって世界で100%近い生産を挙げておりました。しかし、その後、5年から10年も経つと、優れた技術は、韓国や中国、台湾など新興国に模倣されてしまった訳です。これは結局、日本の工学は、技術は優秀で優れた製品を開発したが、それを継続的に維持するような戦略性・ビジネスシナリオなどが欠けていたことを示しています。逆に言えば、優れた研究成果や技術に加え、戦略性を持たず、世界的競争力を維持できる、ということです。もっと言えば、日本がものづくりにおいて、「新しい価値を創造すること」を強く意識する必要があります。

では今後、日本の進むべき方向を考えてみましょう。日本の現状には、少子高齢化・資源がない等の課題もありますが、外国には簡単には真似できない優れた点もあります。日本人には、誠実さ、高い倫理観・礼節、繊細さ、高潔さがあります。会社への帰属意識が強い、これによって、終身雇用制が維持されています。これは、複雑な研究成果や技術の継承には有利です。また日本人には、「仕事を生きがい」という特有の価値観があります。価値創出への信念

(匠の技)もあります。これらも高度な技術創出に向いています。さらに現在の日本には、圧倒的な技術集積度があります。これもさらに高度な先端技術開発に向いています。若い方々には、こうした日本人の長所を前向きに活用し、学問上の飛躍的進歩や新しい価値創造を起こし、「真に豊かな持続可能社会」を実現して欲しいと思います。

ここで、東北大学原子分子材料科学高等研究機構に、フランスから研究員としていらしている Sophie D'ambrosia 博士 (1986年生, 女性) の、「なぜ物理学者になろうと思ったか」の質問への回答を紹介しましょう。「物理学が好きだからです」「研究者も芸術家も、どちらの職業も「創造性」が求められる。創造性を持たず、ただ大きな流れに身を任せ、他者の後を追うだけだったら、仕事としては寧ろ楽かもしれません。そのかわり、アインシュタインが相対性理論を発見したように、ローリング・ストーンズがロックを創り出したように、特別な存在にもなれないし、「世界を変えるようなもの」は何も生み出せないでしょう」ということです。さらに、「数学と物理と化学、材料科学との融合を目指すことは、とても困難な挑戦です。でも成功すれば、すべての分野を横断的に考えられるようになり、劇的に研究が進むでしょう」。そして「世界を変える創造性に挑戦したい」とおっしゃっています。読者の皆さんにも、そうした気概・情熱をもつことになる、衝撃的な機会・出会いがあることを、大いに期待しております。

超音波医学

Japanese Journal of

Medical Ultrasonics

第41巻 第3号 (通巻第281号)

© The Japan Society of Ultrasonics in Medicine

—禁転載—

本体価格 2,000円+税 (本誌購読料は会費に含まれます。)

平成26年5月15日発行

編集者 一般社団法人日本超音波医学会編集委員会 委員長 金井 浩

発行者 一般社団法人日本超音波医学会 理事長 竹中 克

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23-1

お茶の水センタービル6階

TEL 03-6380-3711

FAX 03-5297-3744

印刷所 大村印刷株式会社